



45 歳頃の漱石

なつめそうせき  
夏目漱石

1867年（慶応3）～1916年（大正5）

小説家・俳人

本名は金之助、俳号は愚陀仏。夏目小兵衛直克と福田千枝の五男として、

江戸（現、東京都新宿区喜久井町1）に生まれた、純粹の江戸っ子である。

1867年（慶応3）0歳 2月9日誕生。四谷の古道具屋に里子に出される。

1868年（慶応4）10月23日、明治1年 1歳、すぐ夏目家に連れ戻され、

つづいて新宿在の塩原昌之助の養子となる。

1869年（明治2）2歳、浅草へ移転する。10月2日、ガンジー生まれる。

1870年（明治3）3歳、天然痘に罹り、鼻の頭と頬に痘痕が残る。

1871年（明治4）4歳、新宿に移転する。

1872年（明治5）5歳、正式に塩原家の長男となる。

1874年（明治7）7歳、父、昌之助離婚し、「かつ」と再婚。

漱石、かつの連れ子「れん」と同居。

1876年（明治9）9歳、父と昌之助が大喧嘩をして、漱石は実家に連れ戻される。

1877年（明治10）10歳、西南戦争。東大開校。第一回内国勸業博覧会開催。

1879年（明治12）12歳、この間、小学校を3回転校し、東京府立第一中学校正則科に入学。

1881年（明治14）14歳、1月、母千枝没。府立一中を中退し、漢文を学ぶため二松学舎という塾に転校。

1882年（明治15）15歳、英語を学ぶため、神田の成立学舎に入学。

1883年（明治16）16歳、小石川の新福寺に下宿。

1884年（明治17）17歳、9月、東京大学予備門予科に入学。漱石は、勉強より、ボート、水泳、器械体操や

1885年（明治18）18歳、友人10人と神田猿樂町の末富屋に下宿。内閣制設置（初代総理は、伊藤博文）

1886年（明治19）19歳、東京大学予備門予科が第一高等中学校と改称される。7月、腹膜炎に罹り進級試験

受けられず、学業も怠け、落第する。その後は悔改め、学業に専念、首席を通す。

私塾の教師となり、塾の寄宿舎に転居。

1887年（明治20）20歳、長兄結核で没、次兄結核で没。富士登山。

塾の教師を辞め、自宅から通学。二葉亭四迷『浮雲』

1888年（明治21）21歳、夏目家に復籍する。第一高等中学校予科を卒業。

秋、本科英文科に入学する。

1889年（明治22）22歳、春、正岡子規を知る。1月、改正徴兵令（国民皆兵化）2月11日、大日本帝国憲法

公布。森有礼刺殺される。子規、『七草集』著す。秋、漱石、『木屑録』を著す。

1890年（明治23）23歳、第一高等中学校本科卒業。秋、東京帝国大学文科英文科に入学。貸費生となる。

1891年（明治24）24歳、特待生となる。『方丈記』を英訳する。

1892年（明治25）25歳、徴兵を避けるため北海道の浅岡方に移籍。5月、

東京専門学校（現在の早稲田大学）の講師となる。

1893年（明治26）26歳、7月、英文科を卒業（2人目の卒業生）大学院に進学、寄宿舎に入る。10月、東京

高等師範学校の英語教師となる。ハワイ、王政廃止され、米国保護領となる。

1894年（明治27）27歳、朝鮮で甲午農民戦争。7月25日、日清戦争勃発。漱石転居をくりかえす。

冬、鎌倉の円覚寺で2週間ほど参禅。神経衰弱になる。

1895年（明治28）28歳、4月、日清講和条約調印。独仏露三国干涉。



正岡子規



25 歳頃の漱石



漱石（20 歳前後の頃）



7 歳の漱石



母の千枝 52 歳で没



父の直克



漱石の恋人 大塚楠緒子  
明治43年、35歳で他界  
詩人・歌人、「お百度詣」

1896年（明治29） 29歳、

失恋？して、松山中学校に英語科教師として赴任。  
子規、従軍記者として満州・朝鮮へ、大咯血して帰国、  
8月、松山の漱石の下宿（愚陀仏庵）に転がり込んだ。  
子規と漱石、俳句に熱中する。10月、子規、帰京する。  
12月、貴族院書記官長の中根重一の長女鏡子と  
見合いし、婚姻。

1月3日、子規庵の句会に参加。

4月、熊本第五高等学校講師として赴任。

6月、熊本市下通町に家を借り、中根鏡子と結婚する。

「俺は学者で勉強しなければならないのだから、  
おまえなんかにかまってはられない。  
それは承知していてもらいたい」と夫人に宣告。

7月、第五高等学校教授となる。月給100円。

1897年（明治30） 30歳、

1898年（明治31） 31歳、

春、転居。鏡子のヒステリー激化。子規、短歌の革新運動に着手。3月、子規庵で初めての歌会。夏、寺田寅彦がはじめて訪問。9月、寅彦らに俳句を教える。身重の鏡子、投身自殺をはかるが助かる。再び転居。

10月、『ホトトギス』第一号発刊。

4月、米西戦争勃発、米国はハワイを合併、フィリピン・グアムを領有。

長女筆子誕生。寺田寅彦、東京帝国大学理科大学に入学。子規、中村不折からもらった絵の具で水彩画を描く。義和団事件。南アフリカ戦争勃発（第二次ボーア戦争）。

1900年（明治33） 33歳、



菅虎雄  
(1864～1943)  
漱石の親友。

小学校の授業料廃止。

1901年（明治34） 34歳、

1月、次女恒子誕生。7月、チェイス81番地に転居（いままで4回転居している）生活費を切り詰めて下宿に籠り、文学の本源を極めようと読書に没頭し、『文学論』の執筆に専念した。本人は、「下宿籠城主義」と言っている。神経衰弱がひどくなる。絵所を栗焼く人に尋ねけり（漱石）

11月6日、子規の漱石宛最後のモーダメ手紙が届いたが、漱石も、モーダメになっいて、返事を書くことも出来なかったらしい。

1月30日、日英同盟締結。ボーア戦争終結。

9月19日に子規が亡くなったと、11月頃、高浜虚子からの手紙で漱石は知った。手向くべき線香もなくて暮の秋（漱石）

1902年（明治35） 35歳、

省は、漱石の精神に異常ありと断定し、漱石と同じ船でドイツに留学した藤代禎輔に「夏目ヲ保護デシテ歸朝セラルベシ」と命じた。しかし、漱石はその命には応じず、

12月5日、1人、日本郵船の博多丸でロンドンを立ち、帰国の途についた。



ブルー・プラーク  
(銘板)



ロンドンの下宿（2階）  
向かいに倫敦漱石記念館がある。



漱石 明治31年



鏡子夫人（18歳）  
見合い写真、



見合い写真、  
漱石（28歳）



松山中学時代の漱石

1903年（明治36） 36歳、1月22日、帰京。3月3日、東京に転居。3月31日付で、熊本第五高等学校を辞職4月、第一高等学校講師（年俸700円）と、ラフカディオ・ハーンの後任として、日本人初の、東京帝国大学文科英文科の講師（年俸800円）になった。一高で、予習をしてこない藤村操に対して、漱石は2度叱った、その直後の5月22日、彼は、華嚴の滝に投身自殺した。自殺の本当の原因は解らない。6月頃、神経衰弱再発。11月、三女栄子誕生。水彩画始める。『平民新聞』創刊される。

1904年（明治37） 37歳、2月、日露戦争勃発。「日韓議定書」。4月、明治大学講師を兼任。8月、トルストイの『悔い改めよ』が平民新聞に掲載される。夏、一匹の黒い子猫が漱石家に迷い込む。虚子が漱石に小説を書くことを勧め、『吾輩は猫である』が生れた。12月、

「山会」で『吾輩は猫である』が虚子の朗読により発表された。

1905年（明治38） 38歳、1月、『ホトトギス』に『吾輩は猫である』を発表。装丁や挿絵や単行本の表紙を、橋口五葉・中村不折・浅井忠らが担当した。小宮豊隆来る。弟子の鈴木三重吉の『千鳥』を絶賛。漱石は、教師をつづけながら、多くの文学作品を発表し文壇に登場。12月、四女愛子誕生。1月1日、旅順陥落。5月27日〜28日、日本海海戦。9月5日、ポーツマス条約調印、日露戦争終結。日比谷焼き討ち事件。

1906年（明治39） 39歳、『草枕』『坊っちゃん』『二百十日』などが書かれた。10月11日、第一回「木曜会」12月、徳富蘆花、第一高等学校で「勝利の悲哀」講演。12月、本郷区駒込西方町10番地に転居。この年、南満州鉄道株式会社が設立された。二代目総裁の中村は公は漱石の親友。『漾虚集』単行本として出版さる。

1907年（明治40） 40歳、春、東京帝国大学と第一高等学校を辞める。

5月3日、朝日新聞社に入社、月給200円。  
（新聞に漱石の「入社」の辞「載る」『野分』『文学論』『虞美人草』など執筆。6月、長男純一誕生。  
総理大臣西園寺公望から「私と作家の集い」である「雨声会」に招かれるが、執筆に忙しいと断る。

9月、牛込区早稲田南町7番地に転居。ここが最後の家となる。

書斎が「漱石山房」と呼ばれるようになる。

神経衰弱にかわって胃病に苦しむ。

1908年（明治41） 41歳、『坑夫』『文鳥』『夢十夜』『三四郎』執筆。

9月、黒猫が病死する。

12月、次男伸六誕生。清、溥儀が即位。

1909年（明治42） 42歳、『永日小品』『文学評論』『それから』

『満韓とところどころ』など執筆。

9月〜10月、満州、朝鮮を旅行。

10月26日、伊藤博文ハルピンで暗殺される

1910年（明治43） 43歳、『門』『思ひ出す事など』など執筆。

五女雛子誕生。6月〜7月、胃潰瘍で入院。

8月24日、修善寺の大患

4月、『白樺』創刊。5月、大逆事件

8月22日、日韓合併条約調印、朝鮮と改称

石川啄木『時代閉塞の現状』『一握の砂』

10月28日、トルストイ家出、11月、没（82歳）



明治43年4月の漱石



漱石山房（書斎）



明治41年12月の漱石



悪妻の誉れ高い鏡子夫人



明治44年4月12日漱石山房の前庭で  
前列左から恒子、鏡子夫人、純一、愛子、筆子、栄子、後列右から漱石



1911年（明治44）44歳、1月24日、幸徳秋水ら処刑される。津田青楓に南画や水彩画を学ぶ。



平塚雷鳥（らいちょう）  
明治41年3月、森田草平と心中未遂事件。その後、青鞥社を結成した。

1912年（明治45／大正1）

『彼岸過迄』など執筆。内田百閒来る。

1月1日、孫文の中華民国建国宣言。

2月12日、宣統帝（溥儀）退位、清滅亡

4月15日、タイタニック号沈没事故。

4月13日、石川啄木没。

7月30日、明治天皇没。

9月13日、乃木夫妻殉死。12月、『行人』連載開始

強度の神経衰弱、次男伸六をステッキで殴りまくる。

胃潰瘍悪化。3月、『行人』連載中断、

9月に再開。11月に完了。痔の再手術。

この年、東京府平民に戻る。

8月5日、岩波茂雄（一高の教え子）が、

岩波書店を立ち上げる。翌年『こころ』出版。

1月、桜島大正大噴火、大隅半島とつながる。

『いろ』など執筆。鏡子ヒステリー。

7月28日、第一次世界大戦勃発。

9月、胃潰瘍で入院。良寛の書に出会う

11月25日、学習院輔仁会において

「私の個人主義」と題して講演。

『硝子戸の中』『道草』などを執筆。

芥川龍之介・久米正雄らが漱石を訪問。

3月、京都旅行。5度目の胃潰瘍で病臥。春の川を隔てて男女哉（漱石）

1916年（大正5）49歳、

5月より『明暗』連載開始。4月、糖尿病と診断さる

冬、胃潰瘍再発。12月9日、午後6時45分死去。

『明暗』は未完に終わる。

森田草平のすすめで、

新海竹太郎がデスマスクを取る。

夫人の希望で、翌日、東大医科大学で遺体を解剖。

1425グラムの脳と胃が医科大学に寄付された。

死後、漱石の蔵書や遺品類は、

東北帝国大学附属図書館に寄付され、

東北大学附属図書館「漱石文庫」の誕生となった。

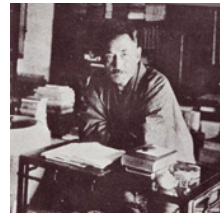
岩波書店から『明暗』出版。

11月7日、ロシア革命。

11月11日、第一次世界大戦終結。



漱石の墓 都立雑司ヶ谷霊園  
墓碑の揮毫は菅虎雄



書斎の漱石  
大正3年12月

1915年（大正4）48歳、



漱石と鏡子夫人  
大正3年 秋

1914年（大正3）47歳、



漱石 大正元年9月撮影

1913年（大正2）46歳、



大正4年 左から、純一9歳、愛子11歳、筆子17歳、  
恒子15歳、栄子13歳、伸六8歳、梓内は雛子2歳



漱石 大正元年9月12日



大正3年（1914）12月  
漱石・伸六（左）・純一

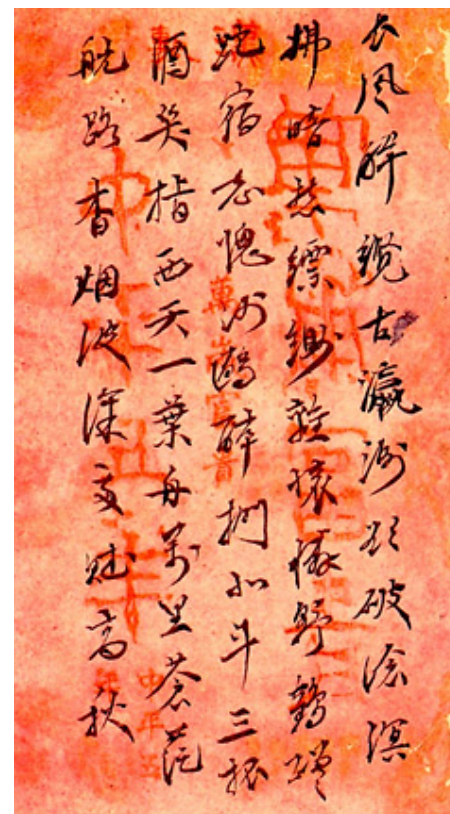


大正5年12月9日、死の床の漱石



漱石のデスマスク

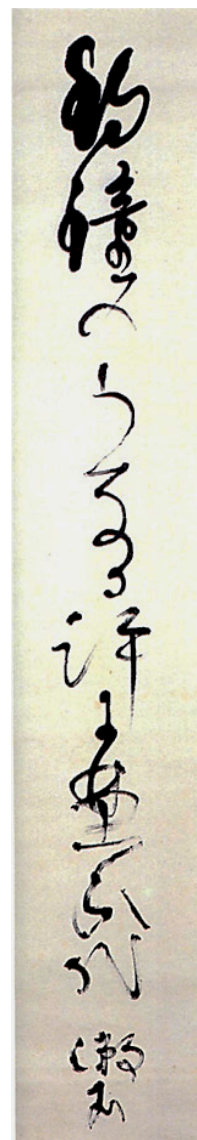




漱石「無題」七律 明治33年頃 22.0×12.5 cm  
今治市河野美術館蔵

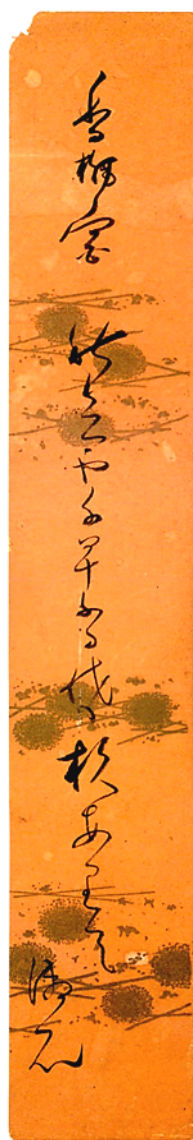
長風解纜古瀛洲  
欲破滄溟暗愁  
縹緲離懷憐野鶴  
嗟跌宿志愧沙鷗  
醉挹北斗三杯酒  
笑指西天一葉舟  
萬里蒼茫航路杳  
烟波深处賦高秋

英国留学に  
出發する時  
の心境を詠  
んだもの。  
菅虎雄宛の  
書簡に「君  
貫った紙へ  
から貰った  
筆を以って  
君から授か  
ら行した法  
を実行した  
か」と斯様な  
のが出来る  
と書いている。



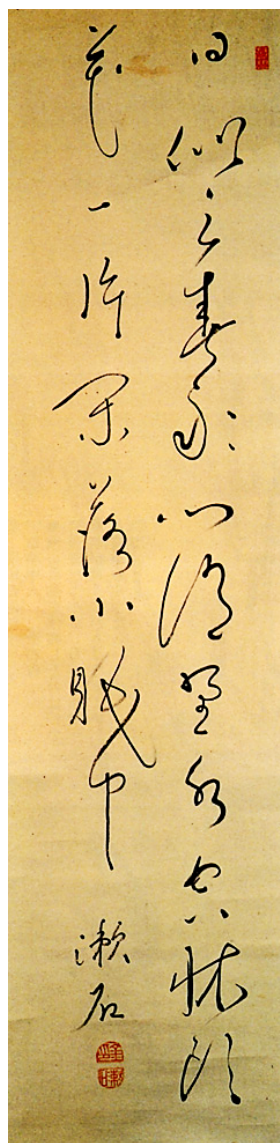
漱石「条幅」  
明治39年句作  
書の制作年は不明。  
126.0×20.5 cm

釣鐘のうなる許に埜分哉 漱石



漱石「短冊」  
明治29年9月句作。  
書は明治43年1月25  
日に揮毫か？  
36.3×6.0 cm

香椎宮 秋立つや千早ふる代の杉ありて 漱石  
鏡子夫人とともに北九州へ旅行した時に福岡市で詠まれた句。子規へ送って添削を受けている。



漱石「五絶条幅」  
明治43年10月1日詩作  
131.0×33.5 cm  
書の制作年は不明。  
日本近代文学館蔵

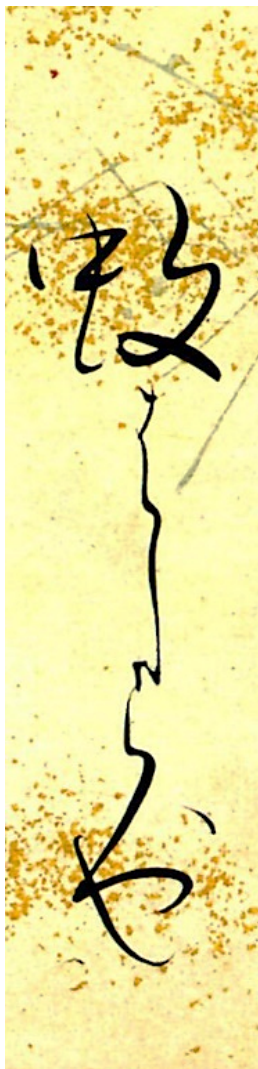
日似三春永 心随野水空 牀頭花一片 閑落小眼中 漱石  
詩は大患後の作品。日記に書かれたもの。  
日は三春に似て永く 心は野水に随ひて空し 牀頭に花一片 閑かに落つ小眠の中



漱石「無題」より七言二句  
明治43年10月4日詩作  
108×29 cm。書の制作年は不明  
蔭の拓本は平福百穂による。

風過古澗秋声起 日落幽篁暝色来 漱石山人 『思ひ出す事など』の32章にある。  
風は古澗を過ぎて秋声起こり 日は幽篁に落ちて暝色来たる





部分拡大

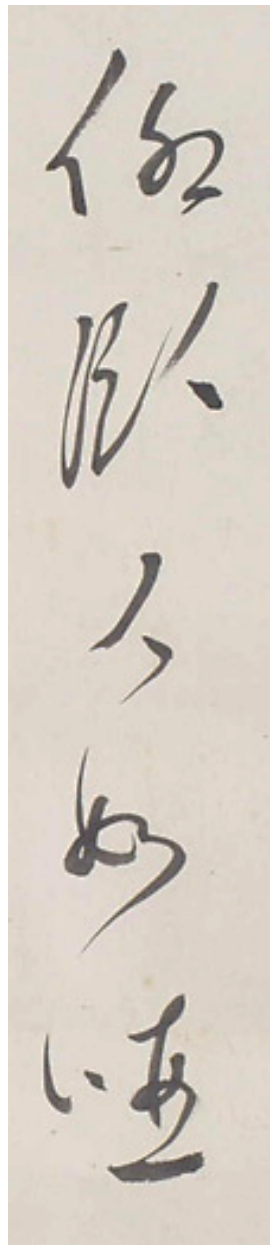


漱石筆「蚊ばしらや」句色紙 制作年不詳 軸装

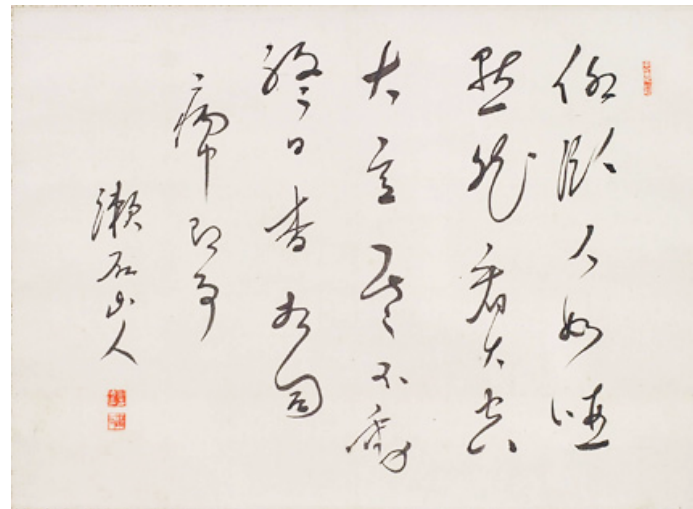
伊丹市の柿衛文庫蔵

蚊は（者）しらや 断食堂の 夕暮れに（耳） 漱石

「先生は長鋒の筆を好まれて、吾々の使ふ物の二倍もあるやうな長い毛を自由に操られて、一点一画にも細心の注意を払ひながら、心静かに書かれた。……一氣に書かれることは極めて稀で……多くの場合は、一字々々、或は一線々々、考へ考へ書かれると云ふ風であつた。けれども、それだからとて、筆に勢ひがないかと云ふのではない。落着いた、品の好い、位置の正しい物を書かれるのが先生の御趣意で、僕等が見て筆力奔放などと思ふものは、恐らく先生には虚勢を張つたやうに見えたり、或ひは俗気紛々たるもののやうに見えたらしい。」（大正6年、『新小説』臨時増刊「文豪夏目漱石」滝田樗蔭「夏目先生と書画」より）



一行目部分



漱石書「無題」明治43年（1910）29.7×41.3 cm 早稲田大学図書館蔵

仰臥人如唾  
默然看大空  
大空雲不動  
終日杳相同  
病中即事  
漱石山人

ぎょうがひとあ  
こと  
もくねんたいくう  
み  
たいくつもうご  
あ  
しめうじつよう  
おなじ  
同  
びようちゆうそくじ  
病中即事  
そうせきさんじん  
漱石山人

明治43年、『門』を脱稿した漱石は、胃病のため入院。一ヶ月半後に退院し、修善寺温泉の菊屋旅館に転地療養のため滞在した。しかし、病状は悪化し、8月24日に大吐血、一時危篤状態に陥つたが、一命をとりとめた。この詩は、9月29日、菊屋旅館の病床で日記に書かれたものである。この臨死体験によって、漱石は生命の尊さと、人びとの優しさに深く感謝した。この体験は、漱石のその後の人生や創作に大きな影響を与える事になった。

「仰向に寝た余は、天井を見つめながら、世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み悪いとのみ観じた世界にたちまち暖かな風が吹いた。四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に、忙しい世が、これほどの手間と時間と親切をかけてくれようとは夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に謝した。また余のためにこれほどの手間と時間と親切とを惜しまざる人々に謝した。そうして願わくは善良な人間になりたいと考へた。そうしてこの幸福な考えをわれに打壊す者を、永久の敵とすべく心に誓つた。」

『思い出す事など』19章より

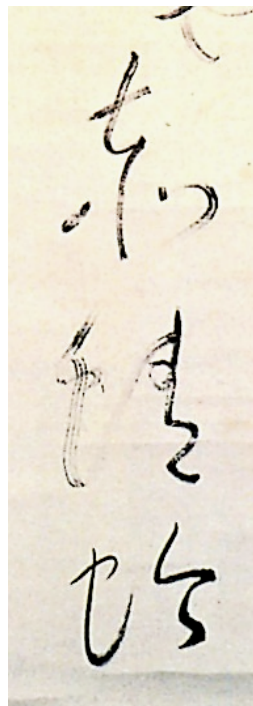
修善寺自然公園内に詩碑がある。



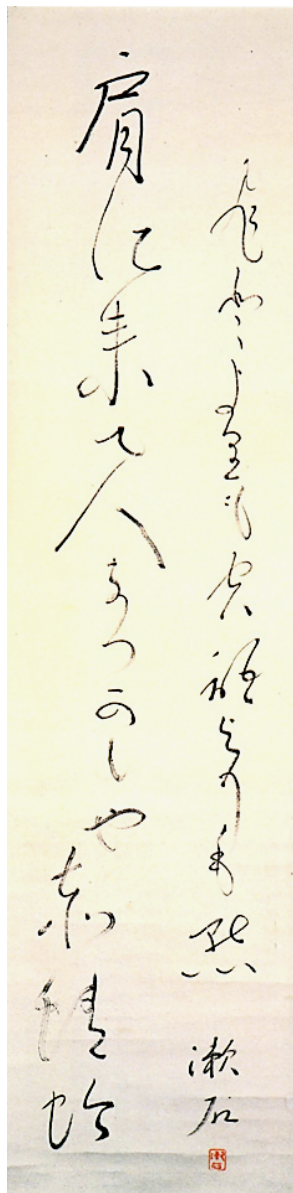
雲去来 漱石書 禅語の「青山元不動 白雲自去来」からか？



漱石筆「雲去来」軸 大正5年頃 28.7×21.5 cm



部分拡大(赤蜻蛉)



漱石筆「ひとよりも」131×33.1 cm  
大正5年書 明治43年句作  
日本近代文学館蔵

竹一本葉四五枚に 冬近し 漱石



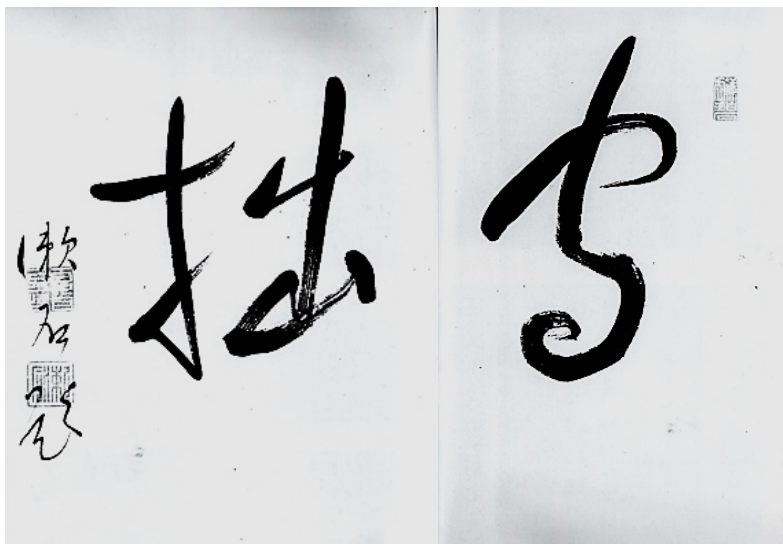
漱石自画賛「竹図俳賛」  
大正4、5年？ 143.7×35.1 cm



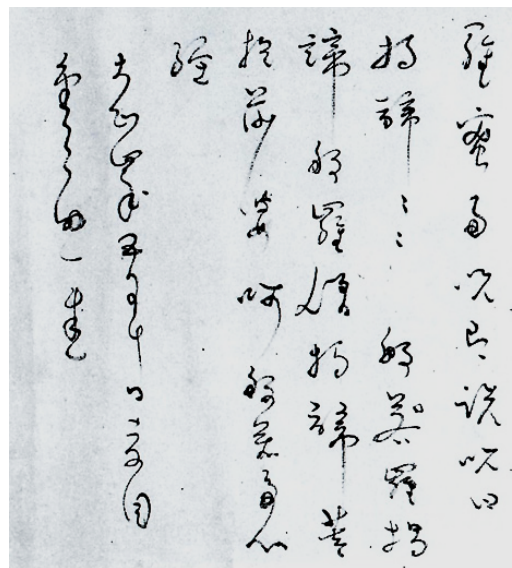
漱石自画賛「竹図詩賛」  
大正4年？ 132.7×33.0 cm

戯画竹加賛 二十年来愛碧林 山人須解友虚心 長毫漬墨時如雨 欲写鏗鏘戛玉音 漱石山人詩画  
戯れに竹を画きて賛を加う 二十年来 碧林を愛す 山人 須ず解く虚心を友とせよ 長毫 墨に漬  
して時に雨の如く 写さんと欲す 鏗鏘戛玉の音 漱石は、よく竹の絵を描いた。

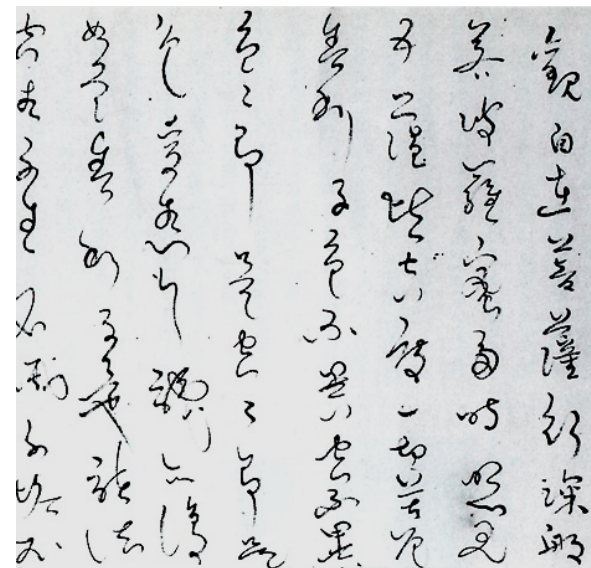
ひ(飛)と(登)より(里)も空 語よ(与)りも(毛)黙 漱石  
肩に来て人な(奈)つか(可)しや赤蜻蛉  
「修善寺の大患」の直後に作られた句を最晩年に揮毫したもの。  
・・・病気になつて仰向に寝てからは、絶えず美しい雲と空が胸に描かれた。・・・おれは暖かな秋の色と其色の中から出る自然の香が好きだと答へて呉れと傍のものに頼んだ。所が今度は小宮君が自身で枕元へ坐つて、自然も好いが人間の背景にある自然でなくつちやとか何とか病人に向かつて古臭い説を吐き掛けるので、余は小宮君を捕へて御前は青二才だと罵つた。——其位病中の余は自然を懐かしく思つてゐた。  
空が空の底に沈み切つたように澄んだ。高い日が蒼い所を目の届くかぎり照らした。余は其射返しの大地に沿ねき内にしんとして独り温もつた。さうして眼の前に群がる無数の赤蜻蛉を見た。さうして日記に書いた。——「人よりも空、語よりも黙。……肩に来て人懐かしや赤蜻蛉」……『思ひ出す事など』二十四章より)



漱石書『守拙帖』扉の「守拙 漱石題」大正3年 34.0×49.5 cm  
大正4年に西川一草亭に贈ったもの。良寛風の書。



漱石書「般若心経」冒頭部と末尾部 大正4年5月10日 33.7×164.3 cm 西川一草亭に贈ったもの。



大正3年（1914）頃？、漱石は、展览会か何かで良寛の書に出合い、大きく深い影響を受けることになった。「良寛上人は嫌いなもののうちに詩人の詩と書家の書を平生から数えていた。詩人の詩、書家の書といえど、本職という意味から見て、これほど立派なものはない筈である。それを嫌う上人の見地は、黒人の臭みを悪む純粋でナイーブな素人の品格から出ている。心の純なるところ、気の精なるあたり、そこに摺れ枯らしにならない素人の尊さが潜んでいる。腹の空しい癖に腕で掻き廻している悪辣がない。器用のようにその実は大人らしい雅気に充ちた厭味がない。だから素人は拙を隠す技巧を有しただけでも黒人よりも増したといわなければならない。自己には真面目に表現の要求があるということが、芸術の本体を構成する第一の資格である。……」

（漱石、評論『素人と黒人』1914年1月より）

「明治44年頃？）……越後の方から良寛の書を手に入れました。……さっぱり読めない草書が書いてありましたが、そのころはまだ良寛熱の盛んにならない前のことで、三十五円か何かそんなことのようにでした。がこれはあまりできがよくないとか申しまして、もう少しいい良寛が欲しいといってまたお願いしていたようでした。するとそれからほどへて、……良寛を集めて珍藏してられる方があって、それほど好きならほかならぬ先生のことだから、珍藏の一幅をわかちましょう。そのかわり何か字を書いてくれるということで、自分でも喜んで半折か何かを書いたあげて、そのうえ五十円ばかりの謝儀をつけてあげたようでした。物は小さい横物で、和歌が書いてありました。これはたいへん気に入って珍重していたようです。」（夏目鏡子『漱石の思い出』文春文庫 43章より）

木瓜咲くや漱石拙を守るべく（明治30年の漱石の句）

漱石は、若い時から晩年まで、「拙」を好んだ。

「守拙」は、陶淵明の「歸園田居五首（其二）」「守拙歸園田」などに出てくる。

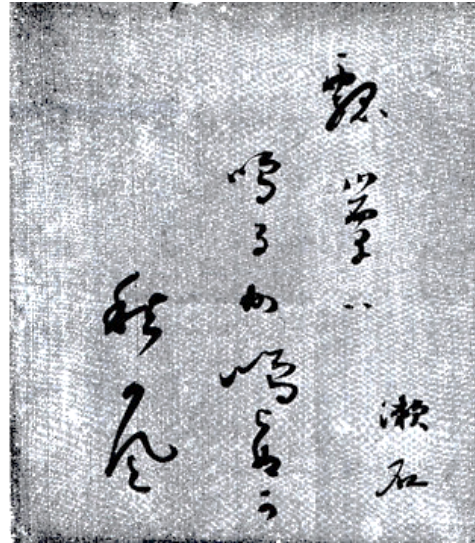
「拙」とは、現実世界を俗と感じ、「この濁世に同調しない孤高を示す語」（徐前氏）。漱石には、厭人・厭世主義による現実脱出願望があった。彼は、「拙」と同じ意味の「癡」「愚」といった言葉を好んだ。老子の思想の影響だと思われる。

「子規は人間として、又文学者として、もともと『拙』の欠乏した男であった」（漱石『子規の画』明治44年より）

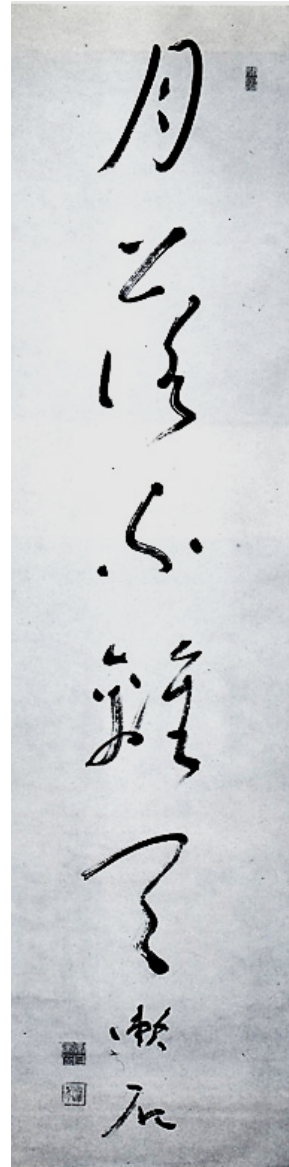




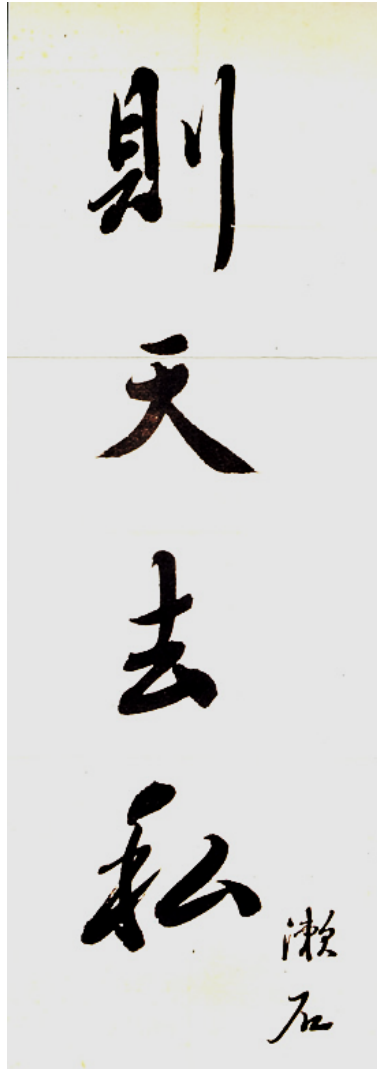
漱石書「夜静庭寒」大正5年頃 55.3×57.3 cm 神奈川近代文学蔵



漱石書「色紙」大正5年11月16日 21×18 cm  
瓢箪は鳴るか鳴らぬか秋の風 漱石



漱石「条幅」大正5年頃  
128.2×32.5 cm 禅語  
月落不離天 漱石



漱石「条幅」大正5年10・11月  
『大正6年文章日記』(大正5年11月20日、新潮社発行)の1月の扉のために書かれた。漱石は大正5年11月9・16日の木曜会(最後の木曜会)で芥川龍之介ら門下生にこの語について語ったという。

「則天去私」は、漱石の造語である。しかし、漱石が、これについて書いたものがない。それで、木曜会の弟子達の回想などを参考に、意味を推測するしかないようだ。これは、老荘思想や禅の影響が大きいと思われる。特に、『明暗』や晩年の漢詩は、これを具現した作品であると思われる。

「芸術は自己の表現に始つて、自己の表現に終るものである。……自分の冒頭に述べた信条を、外の言葉で云ひ易へると、芸術の最初最終の大目的は他人とは没交渉であるといふ意味である。親子兄弟は無論の事、広い社会や世間とも独立した、全く個人的のめいめい丈の作用と努力に外ならんと云ふのである。他人を目的にして書いたり塗ったりするのではなくて、書いたり塗ったりしたいわが気分が、表現の行為で満足を得るのである。其所に芸術が存在していると主張するのである。従つて、純粹の意味からいふと、わが作物の他人に及ぼす影響については、道義的にあれ、美的にあれ、芸術家は顧慮し得ない筈なのである。夫を顧慮する時、彼等はたとひ一面に於て芸術家以外の資格を得るにせよ、芸術家としては既に不純の地位に墮在して仕舞つたと自覚しなければならぬのである。悲しいかな実相を自白すると、我々は常に述作の上に於て、幾分か左右前後を顧みつつ、墮落的に仕事をしておる場合が多い。そのうちで、我々を至醇の境界から誘き出さうとする最も権威ある魔は他人の評価である。此魔に犯されたとき我々は忽ち己れを失却してしまふ。さうして恰も偶像礼拝者の如き陋劣な態度と心情を以て見苦しき媚を他に売らうとする。さうして常に不安の眼を輝かし空疎な腹を抱いて悶え苦しまなければならない。其所が問題なのである。……徹頭徹尾自己と終始し得ない芸術は自己に取つて空虚な芸術である。……」(夏目漱石『文展と芸術』より)

これは、大正元年、第6回文展を見た漱石が「東京朝日新聞」紙上に、10月～11月にかけて、12回にわたつて連載した、生涯ただ一つ的美術評論である。

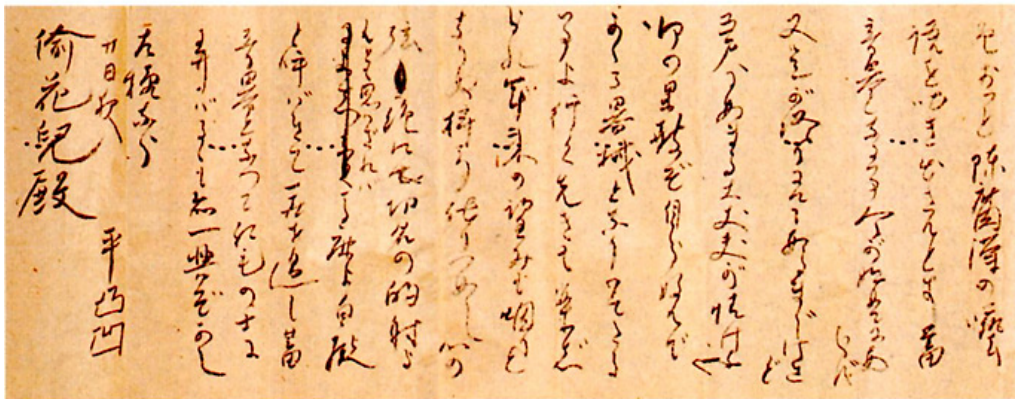
「則天去私」「自己本位」という生き方。思想。



# 漱石の手紙

2015年2月現在、100人以上に宛てた2500通余りの手紙が知られている。漱石の手紙を受け取った人は、それを大事に残したようである。それらの手書きの手紙には、漱石の息づかいが感じられ、人間らしく暖かい漱石がそこに居るようである。王羲之や良寛の手紙のように、漱石の手紙が愛されてきたのは、書かれていた内容よりも、漱石の優しさに満ちた好ましい人間性が、その書によって匂いたつたのよう感じられるからであらう。

永き日や欠伸うつつして別れ行く（漱石）  
本名は頼とわからず草の花（漱石）

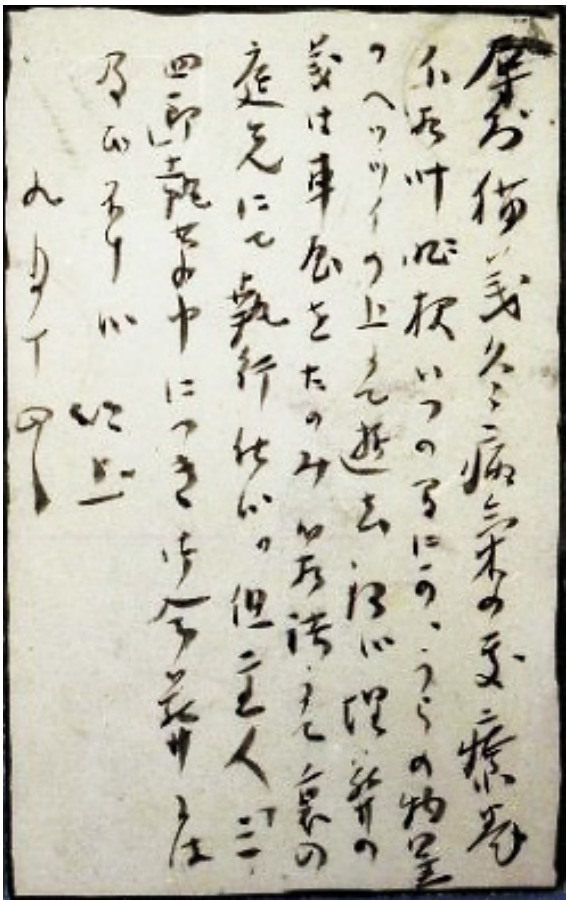


漱石の正岡子規あて書簡（部分） 明治24年（1891年）4月20日付

「狂なるかな狂なるかな僕狂にくみせん。君が芳墨を得て始めはその唐突に驚ろきそれから腹を抱へて満案の呻を噴き、終りに手紙を掩ふて泣然たり。君の詩文を得て此の如く数多の感情のこみ上げたるは今が始めてなり。君が心中一点の不平俄然炎上して満腦の大火事となり、余焰筆頭を伝はつて三尺の半切に百万の火の子を降らせたるは見事にも目ばゆき位なり。平日の文章心を用いざるにあらず、修飾なきにあらず。ただ狂の一字を欠くが故に人をして瞠若たらしむるに足らず。ただこの一篇狂氣爛漫わが衷情を寸断し、わが五尺の身を戦慄せしむ。『七草集』はものかは『隠れみの』も面白からず。ただこの一篇・・・嗚呼狂なる哉、狂なるかな僕狂にくみせん。僕既に狂なる能はず、甘んじて蓄音機となり、来る二十二日午前九時より文科大学哲学教場において団十郎の仮色おつと陳腐漢の囁語を吐き出さんとす。蓄音器となる事今が始めてにあらず、またこれが終りにてもあるまじけれど五尺にあまる大丈夫が情けなや。何の果報ぞ自ら好んでかかる器械となりはてたる事よ。行く先きも案じられ年来の望みも煙りとなりぬ。梓弓張りつめし心の弦絶えて功名の的射らんとと思はざれば、馬鹿よ白痴と呼ばれて一世を過し、蓄音器となつて紅毛の土に弄ばるるもまた一興ぞかし。さやうなら。

廿日夜  
はなぬすびと  
偷花児殿（※偷花児は子規の別号）

平凸凹



漱石の小宮豊隆宛はがき 明治41年（1908）9月

「辱知 猫儀 久々病気の処療養不相叶 昨夜いつの間にかうらの物置のヘツツイの上にて逝去 致 候 埋葬の義は車屋をたのみ箱詰にて裏の庭先にて執行 仕 候 但 主人「三四郎」執筆中につき御会葬には及び不 申 候 以上 九月十四日」※「辱知」とは（知を 辱 くる意）その人と知合いであることの謙讓語。※「ヘツツイ」とは釜。

これは、『吾輩は猫である』のモデルとなった猫の死亡通知の黒梓のはがき。猫は漱石山房の北側に埋められた。

行く年や猫うづくまる膝の上（漱石）



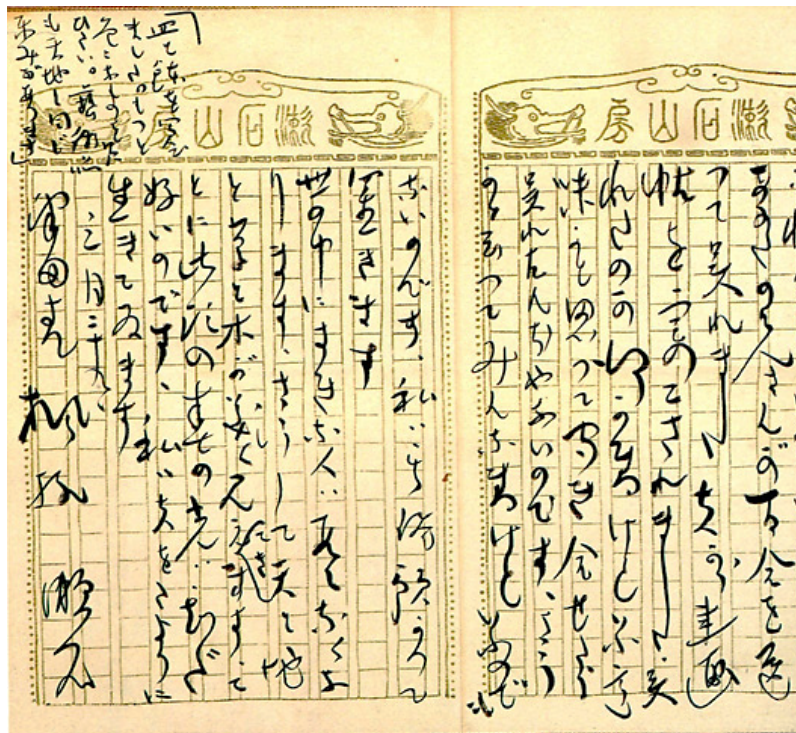
朝顔や咲いた許の命哉（漱石）  
 生きて仰ぐ空の高さよ赤蜻蛉（漱石）  
 野菊一輪手帳の中に挟みけり（漱石）  
 曼珠沙華あつけらかんと道の端（漱石）



漱石の橋口貢宛水彩絵葉書 明治 37 年 10 月 24 日  
 14.0×9.0 cm

君の句の見付所は皆／艶麗なる点なり君／  
 は奇麗な事が数寄と／思ふ。句々皆前回よ  
 り／は大進歩なり可賀く／不産女の句だ  
 けは俗なり故らなり、水牛の句／新らし  
 くて面白し、濡／小袖の句配合物はよけ  
 れ／ど鏡台の上に小袖ある／は如何草庵  
 の句よろ／し但し少々陳腐也、緋／の袴の  
 句はもつるやの／四字わろし意匠はよ／  
 ろし、此等の趣味さへあ／れば発句は何で  
 もなし／やり給へ 二十四日

漱石の水彩絵葉書は日露戦争中に集中  
 してかかれています。数百枚かかれたという  
 説もある。ほとんどが橋口貢宛である。橋  
 口貢は橋口五葉の兄。五葉は漱石の作品の  
 装丁や挿絵を数多く手がけた画家である。



漱石の津田青楓宛書簡部分 大正 3 年（1914）3 月 29 日 日本近代文学館蔵

「皿と鉢を買いました。もつと色々なもの  
 を買ひい。芸術品も天地と同じ楽しみがあ  
 ります。」※津田青楓は日本画家、油画も  
 する。漱石は日本画と油画を青楓に習って  
 いる。兄は西川一草亭。

三月二十九日  
 津田青楓様  
 漱石



漱石山房原稿用紙（橋口五葉図案）に書かれている。

まだ修禪寺に御逗留ですか  
 私はあなたが居なくなつて  
 淋しい気がします面白  
 い画を沢山かいて来て見  
 せて下さい金があつて  
 からだが自由ならば私  
 も絵の具箱をかついで  
 修善寺へ出掛たい  
 と思ひます。私は  
 いふので四月  
 ・・・・  
 あなたの兄さんが百合を送  
 つて呉れました夫から書画  
 帖を寄こされました。呉  
 れたのか何か書けといふ意  
 味かと思つて聞き合せたら  
 呉れたんぢやないのです、さう  
 かと云つてみんな書けといふのも  
 ないのです。私は其儘預かつて  
 置きます  
 世の中にすきな人は段々なくな  
 ります。さうして天と地  
 と草と木が美しく見えてきます、こ  
 とに此頃の春の光は甚だ  
 好いのです、私は夫をたよりに  
 生きてゐます